

地元の色：十日町染織

豊かな織物の伝統を受け継ぐ十日町には、染色に最適な軟水がある。これは冬の豪雪のおかげだ。雪解け水が地中に吸収される際に、色の定着の妨げとなるミネラル分がろ過され、染めた布を蒸したりすすいだりするのに必要な純水が残るのだ。

越後上布のような植物性の織物の場合、糸は一般的に織られる前に染められる。十日町に特に関連する手法のひとつに、拵（かすり）と呼ばれる防染の技法がある。染め職人は、模様にしたがって主糸の周りに別々の木綿糸を結ぶ。木綿の糸が染料の浸透を防ぎ、本糸の一部を白く保つ。織機では、この白い部分が並んで絵柄が描かれる。当然ながら、この難しい技法には、長さの正確な計算、素材の強度と柔軟性の十分な理解、使用する織機の寸法の予測が必要となる。

絹の場合、染色は通常、織物の後に友禪と呼ばれる防染技法で行われる。何メートルもある白い絹をハンモックのように作業場に吊るし、針の先がついたしなやかな竹の棒でピンと張る。この滑らかな表面に、染め手はまず染めたくない部分に糊を塗り、染めたい部分に刷毛で染料を塗っていく。均一に染め上げ、布の長さによる色のばらつきを防ぐには、長年の訓練が必要だ。デザインはフリーハンドでも可能だが、工房ではスクリーンプリントのように決まったサイズの型紙を使うことが多い。一般的に、それぞれの型紙は1つのカラーレイヤーに対応しており、染料が適切な場所にのみ塗られるように、連続した型紙を正しく並べることも、入念な練習が必要な技術だ。染料を塗布した後、布は色を定着させるために蒸され、その後糊と残留染料を取り除くためにすすがれる。柄によっては、この工程を何度か繰り返すこともある。通常、生地の色は最後に塗られる。

絹に使われるもうひとつの染色技法は、絞り染めの一種である「絞り」と呼ばれるものだ。一列に並んだ小さな布を結び、あるいは一本一本の糸で縫い、染料の入ったバケツに布を浸す。染料は結んだ部分に部分的にしか浸透せず、絞りの特徴である斑点模様と色のグラデーションが生まれる。

地元の染色文化は進化を続けており、十日町の絹染め職人たちは近年、友禪と絞りを組み合わせて、非常にユニークな柄の着物を作り始めている。